

2024年4月3日（水）

老球の細道787号

### プラハを訪れたのは「どこのドイツだ」⑧

・・・ユーロバスケットボールツアー紀行〈Ⅱ〉・・・

会津バスケットボール協会 室井 富仁

#### 【12月29日】PARTⅡ

クラシック音楽に興味を持ったのは教員になってからである。それまで色々なすばらしいクラシック曲を学校の音楽授業で聴いたり、テレビやラジオで流されていたはずなのに、私の感性は一切反応しなかった。それが、愚妻の薦めでイヴァノヴィッチ『ドナウ川のさざ波』、グリーグ『ペールギュント組曲（朝）』、モーツァルト『交響曲26番（悲しみの交響曲）』そして、スメタナ『モルダウ』である。それまでは歌謡曲とポピュラーしか聴かなかった私にとって衝撃だった。こんなにも美しく、心にしみ通る音楽があったとは。

プラハを横切っているのが交響曲『モルダウ』で一躍世界に名が知れた「モルダウ川」だった。川幅が500メートルもあり、岸辺にユリカモメや白鳥などの水鳥が浮かんでいる。あちこちに遊覧船があり、のどかな風景をかもし出していた。事前の下調べを怠ったせい、この川を最初はドナウ川だと勘違いしていた。地図を見たら『ヴルタヴァ川』とあり、すっかりその気になって、ドナウ川のさざ波の曲などを同行者に説明していた私は赤面してしまった。ヴルタヴァ川は、ドイツ語でモルダウ川と呼ばれ、19世紀にまだドイツ語が主流だった頃のネーミングであった。バスの中は静かなプラハ行進曲が流されていたが、モルダウ川と判明してからは、私の頭の中は壮大な交響詩組曲モルダウが流れてきた。

チェコスロヴァキアという国の存在を初めて知ったのは1964年の東京オリンピックの時である。この時、女子体操競技でチェコスロヴァキア代表のベラ・チャスラフスカが個人総合で金メダルをとった。私と同じポスト団塊世代のおじさんたちでこの名前を知らない人はいないだろう。スポーツ選手には珍しく（失礼！）美貌と知性を兼ね備えた存在感は圧倒的だった。現在の女子体操界は小学生のような体型の選手達が主流であるが（身軽で好都合なのだろう）、この時のチャスラフスカは女優、グラビアモデル級だった。そしてまた、彼女は体操選手としてだけでなく、一人の人間として存在感を表していた。かの有名な「プラハの春」の民主化運動に参加して、そこにおいてのリーダーシップは今でも強烈に印象に残っている。その時以来、チェコ、そしてプラハの名前は私の脳裏に刻まれた。

1980年代チチェコスロヴァキアのバスケットボールは男女共に世界トップレベルにいたことを記憶している。その頃、日本では（株）キリンビールがスポンサーになった日本「キリンカップ国際招待試合」が毎年開催されていた。チェコスロバキアも招待され、東京渋谷の代々木第二体育館で全日本と試合をした。私はその試合を見に行っている。その時の男子チームのキャプテンがミハイル・ジェディック。今回私たちがプラハでクリニックを受けるチェコ・ナショナルチームコーチである。

バスは伝統を感じさせる古い体育館に到着。外は厳寒、私は激炎。いよいよ始まる。〈続〉